

Photo Space

記録・創造・交流のための

ロゴデザイン：宮裡茂美

Winter 2021 3号 2021.12.9 発行

現代写真研究所

〒160-0004

東京都新宿区四谷 3-12 9F 5.6F

03-3359-7611 (TEL) 03-3355-1462 (FAX)

http://www.genken.ac

jimukyoku@genken.ac

責任編集 金瀬 胖

禁断掲載

許可なく作品の使用はしないでください。



白いフェンス 2021.11 船橋 © 金瀬胖

時のすがた

教務主任 金瀬 胖

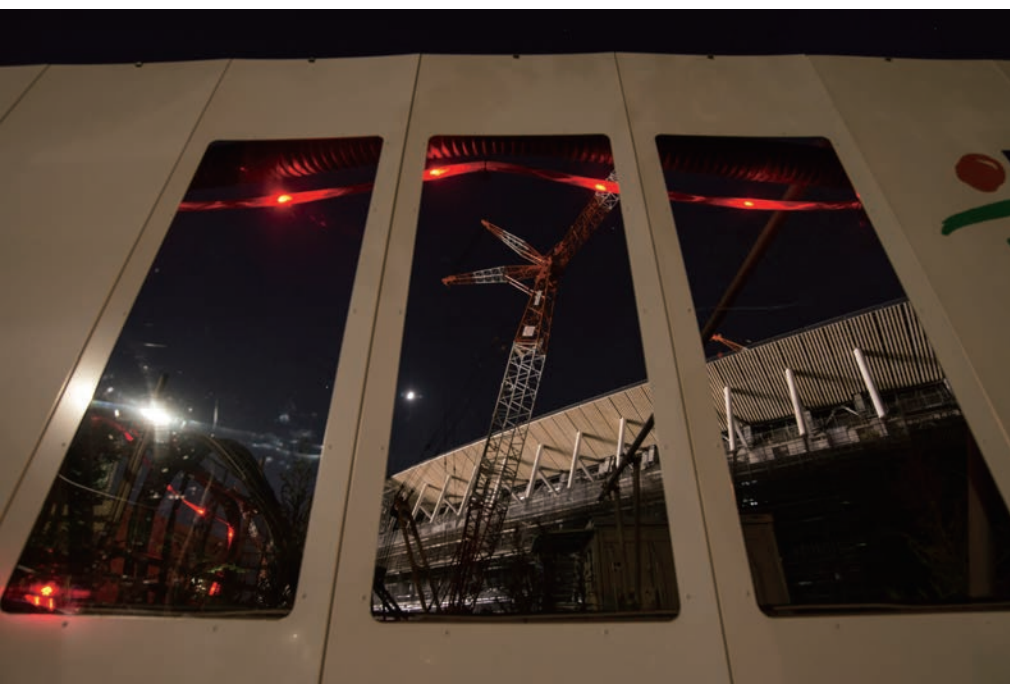
ドキュメント、記録という言葉が重くて硬い、古いものという印象が広がっている。そうしようとする意図、風潮、記録の消滅の戦略もあるように思う。先日、英伸三さんの60年代から撮ってきた「日本の農業と農村」というオンライン講座に同席し、生のプリントを見ていたらそんな言葉のイメージは吹き飛び、今日の奥底に繋がっている「時のすがた」を見た気がする。

「写真とは一言で記録だ」と桑原史成さんは公開講座で断言した。森山大道さんは1972年以来「記録」という本を作り続け、いま49冊。最初は16ページの私家版だった。北島敬三さんは大震災以来、毎年「UNTITLED RECORDS」という写真展を開催し、冊子、本も作り続けた。11月photographers' galleryでVOL.20、最終展を開催した。「眼の前の現実と、各種メディアから侵入するイメージとを区別することが極めて困難になった。日常／非日常、当事者／非当事者、現実／虚構といった二項対立的な思考、遠近法的な視点が危うい時代にいるのではないか。だから自分が撮った写真を何度も読み直しながら撮影している。」「Photo Space」はそれを具体的に実践していく場としてある。

世の識者、歴史家たちの歴史や記録は自分の好みや主張に即して選抜して並べる。だが、写真にはどう選んでも時のすべてが潜在している。写真には、いまあった（過去）が持続していて未来に向かっている。写真はそういう記録なのだ。だから写真は何度も読み直さなければならない。

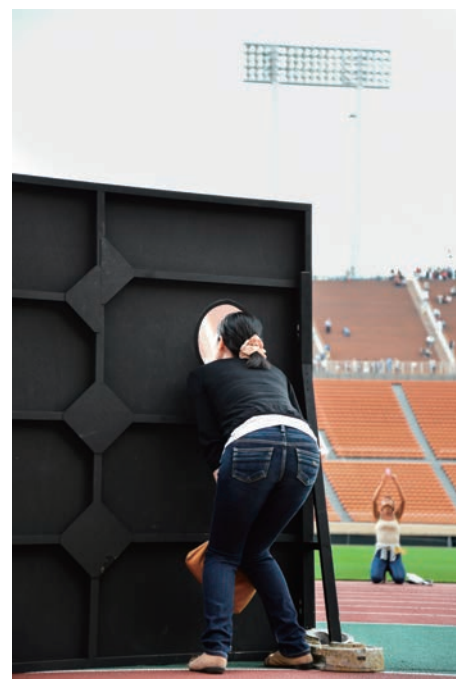
CONTENTS

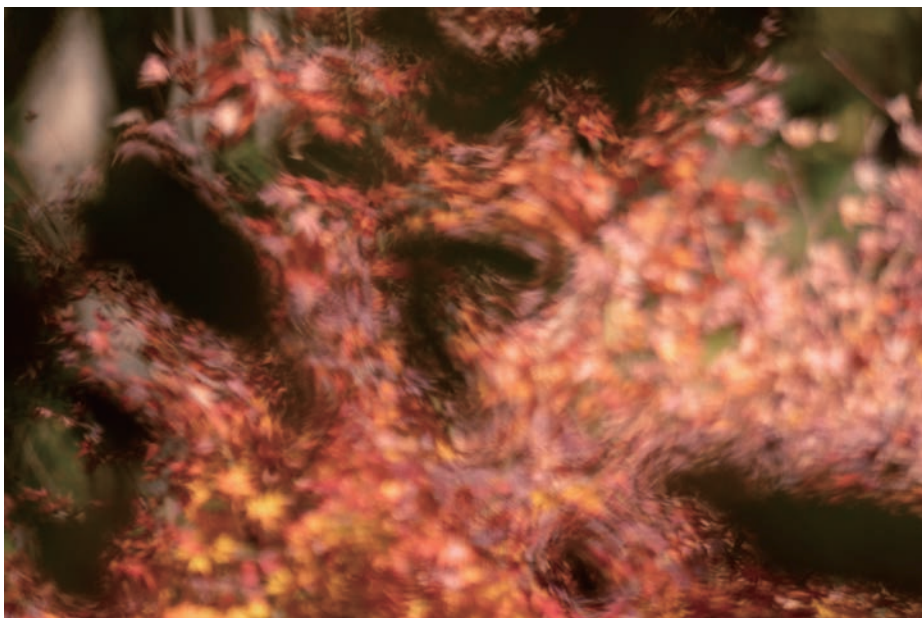
1	時のすがた	金瀬 胖	7	秋の暮れ・無人駅	古澤 潔	12	山へ、還る	高橋 侑也
2	フェードアウト五輪	石田 雅章	8	暮れなずむ	鬼塚 紀子	13	SHIBUYA・蜜と密	青柳 和男
3	肯定	榎本佳代	9	佐渡・祭りの日	後藤 康仁	14	子安一浜景色	金瀬 胖
4	綿花を織る	志摩 悦子	10	飲む治療薬を！	三木 知子	15	『海よ、だまっているなー』	
5	秋小寒一晩秋の奈良	長尾 伸明		バイク便がはねられた。			東京湾からの報告より』	
6	双葉の子らは	宮原 咸太郎		救急車を！	中村 梧郎	16	写真展 山口 保「変奏の大地」	
			11	沖繩	谷口 互			



フェードアウト五輪 石田雅章（フォトジャーナリズム専科）

64年オリンピックは外国に憧れる少年の窓口であり、国立競技場周辺は「大切な原風景」のひとつであった。ジェンダー欠如、特権的差別意識などの前世紀感覚は、私の心から競技場解体以上に原風景がフェードアウトしていった。





「肯定」

榎本佳代（総合科）

「心はいつも同じではなくて、目の前に現れる風景もまたどんどん変化する。

時に写真は心の行方をうまく取り扱えない自分を肯定する時間となる。」



「綿花を織る」 志摩悦子(尾辻ゼミ)

「上州絹の風」展以降、県内の方から織に関する情報が寄せられ、前向きな撮影意欲が湧いてきました。今回は和綿花を育て、紡いで織物を作る工房との出会いでした。綿菓子のようなふんわりとした風合いが、どんな作品を生み出していくのか興味を掻き立ててくれます。すべて手作業なので楽しみにしています。撮影技術を磨かないと綿花の良さは引き出せのかもしれません。





「秋小寒一晩秋の奈良」

長尾伸明(オンラインワークショップ中級)

学生たちの団体客がぞろぞろと大仏殿へ向かう、そんな奈良の晩秋です。



双葉の子らは

宮原咸太郎（オンラインワークショップ写真講座・中級）

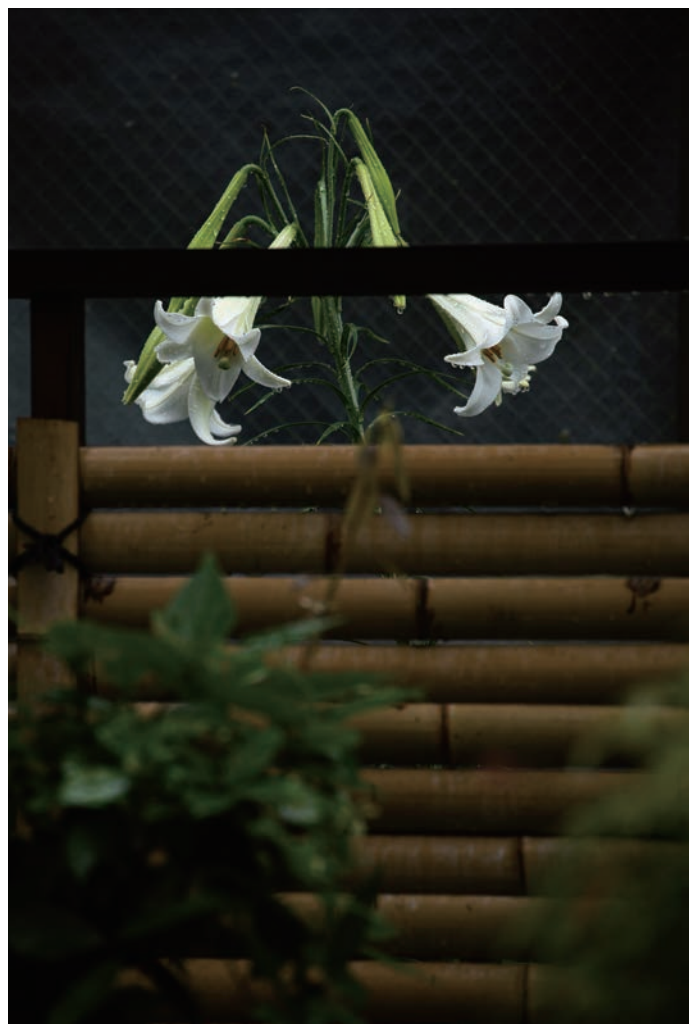
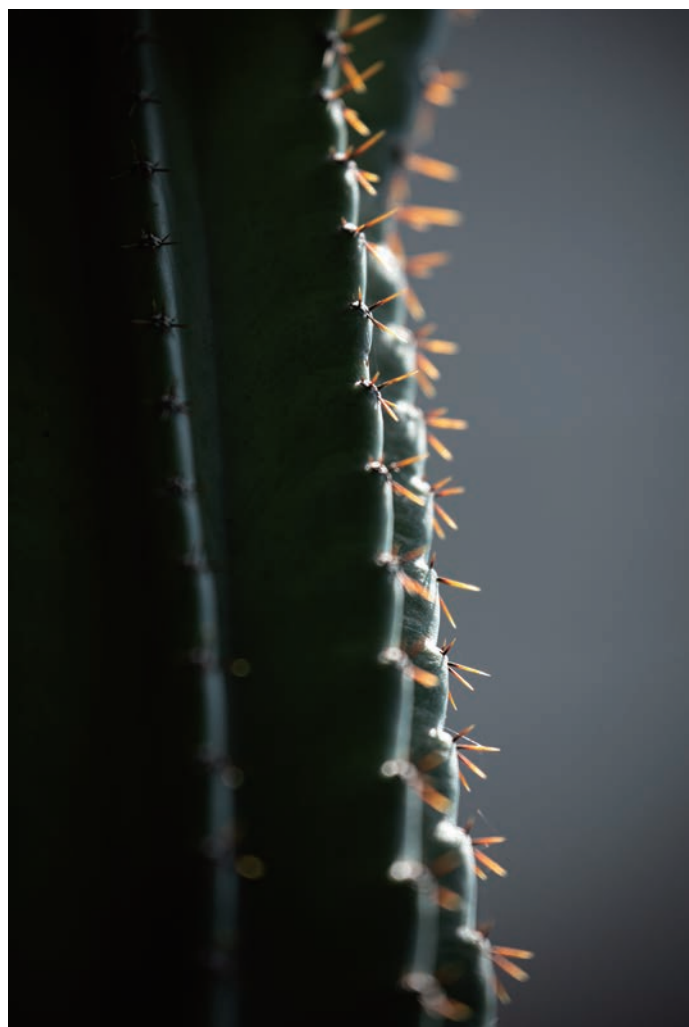
双葉町の小・中学校はいわき市へ疎開して、高校は休校中です。
子供たちはどうしているのか、どうなるのかわかりずにはられない。
校庭のオブジェと窓の決意に悲しみと怒りを感じ、不条理の告発に
繋がればと撮影しました。





秋の暮れ・無人駅 古澤潔（土曜ゼミ・オンラインワークショップ写真講座・中級）

新型コロナウイルス感染のため2年ぶりに帰省。
実家の近くの無人駅まで夕方歩く。山並に陽が沈んでいく中、そこからディーゼルの列車が現れる。（撮影場所 山形市）



暮れなずむ

鬼塚紀子（飯塚ゼミ・オンライン）ワークショップ写真講座・中級）

— 生きものの活動期は夏である、夏の夕暮れはその生きものに
合わせるかのようにゆっくり暮れていく —



宿根木白山神社例祭



加茂歌代赤井神社例祭 (1人の女の子)

佐渡・祭り日 後藤康仁 (金井ゼミ)

佐渡島は、対馬暖流が島を包み中央に国仲平野と両脇を山地が連なり、農作物や海産物に恵まれた島である。佐渡南岸、前浜の湊は、平安の昔から大和や越前敦賀、蝦夷を結ぶ海上路にあり、小木は北前船の中継基地として、相川は鉾山町として江戸期に大いに発展した。海路による交易、人的交流は、信仰や芸能・文化なども運んできた。

鬼太鼓は佐渡の代表的な郷土芸能の1つです。自分たちのお祭り・芸能を持ちたいという思いから明治期以降多くの集落で取り入れてきた。今では百数十のオンデコ組が組織され、春や秋に門付けされる。



飲む治療薬を！ 三木知子（土曜ゼミ・フォトジャーナリズム専科）

「コロナの飲み薬は今こそ欲しい手段です」



バイク便がはねられた。救急車を！！ 20190311 四谷・津之守坂入口で

中村裕郎 フォトジャーナリズム専科講師

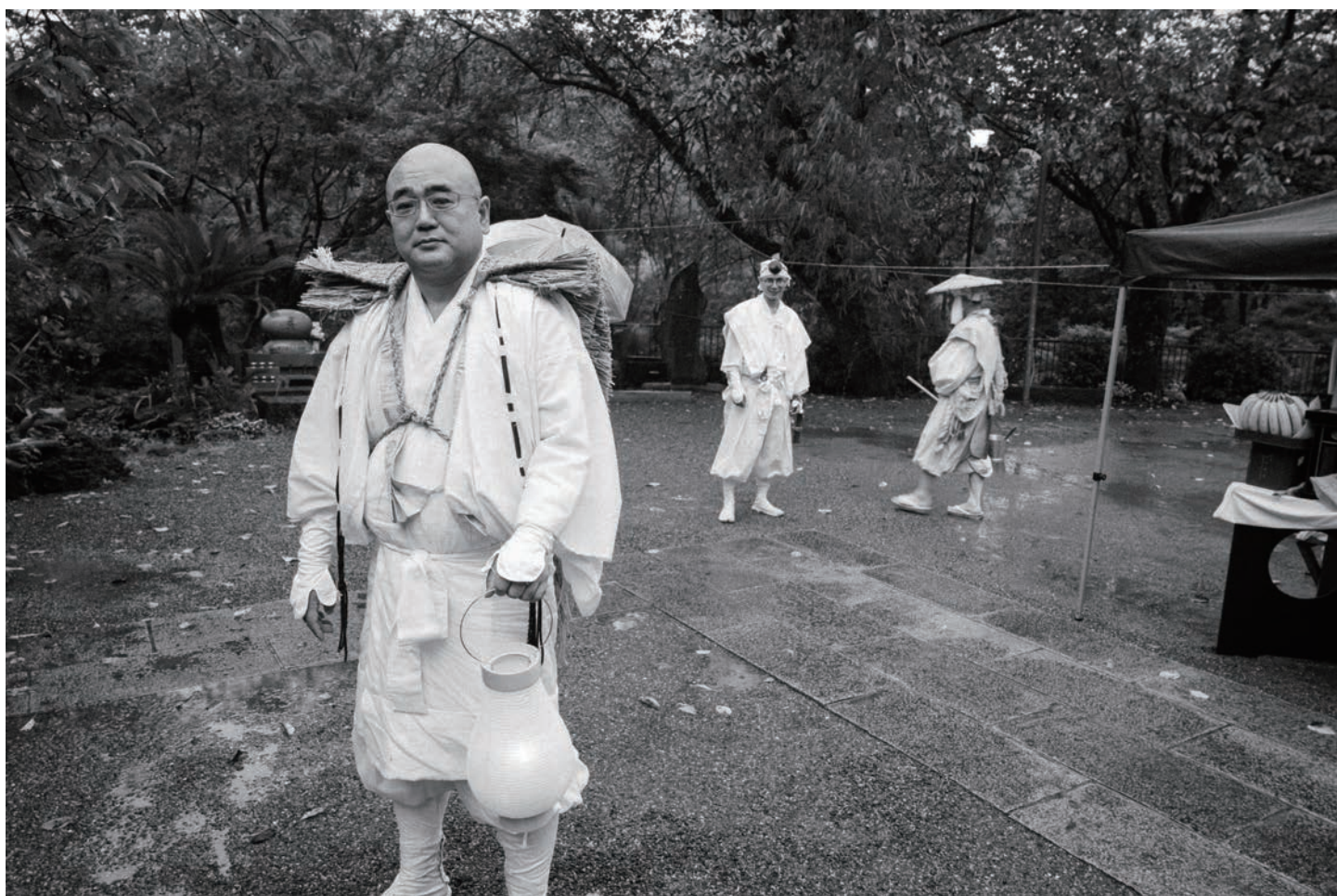


沖縄

谷口互

(オンラインワークショップ写真講座・中級)

緑に覆われた琉球石灰岩の石畳を歩き、東シナ海をのぞむ波打際の青色を見る時、沖縄には自然に対する深い祈りの精神文化があると感じる。



山へ、還る。

高橋佑也（飯塚ゼミ）

休日はハイカーで賑わう丹沢だが、ふと視点をズラすと山伏たちが修行する霊山としての顔が見えてくる。山へ入って修行し、里へ帰ってくる彼らはその中で死と再生を追体験するそうだ。彼らに思いを巡らせて峰を歩くと、風雨に削られて山へ還ってゆく石や枯木の姿に無常と生命力を感じた。



SHIBUYA・蜜と密 青柳和男（土曜ゼミ）

観光スポットとなった渋谷のスクランブル交差点で、カウントダウンを楽しむ人たち。その後、予想もしていなかったコロナ禍のために自粛生活を強いられたが、解除されると人流はいっきが増え密状態となる。これがウィズコロナの姿なのか？

浜通り 舟屋残景



大きな家と蔵の間に二段積みコンテナ



子安一浜景色 金瀬胖

子安の漁港は埋め立て地のビルと倉庫、高速道路にかこまれて久しい。他の地に住まいを移したひともあり、かつての舟屋は車庫などになり、いまだ放置された漁船がある。

2021・11 日曜専科撮影会で

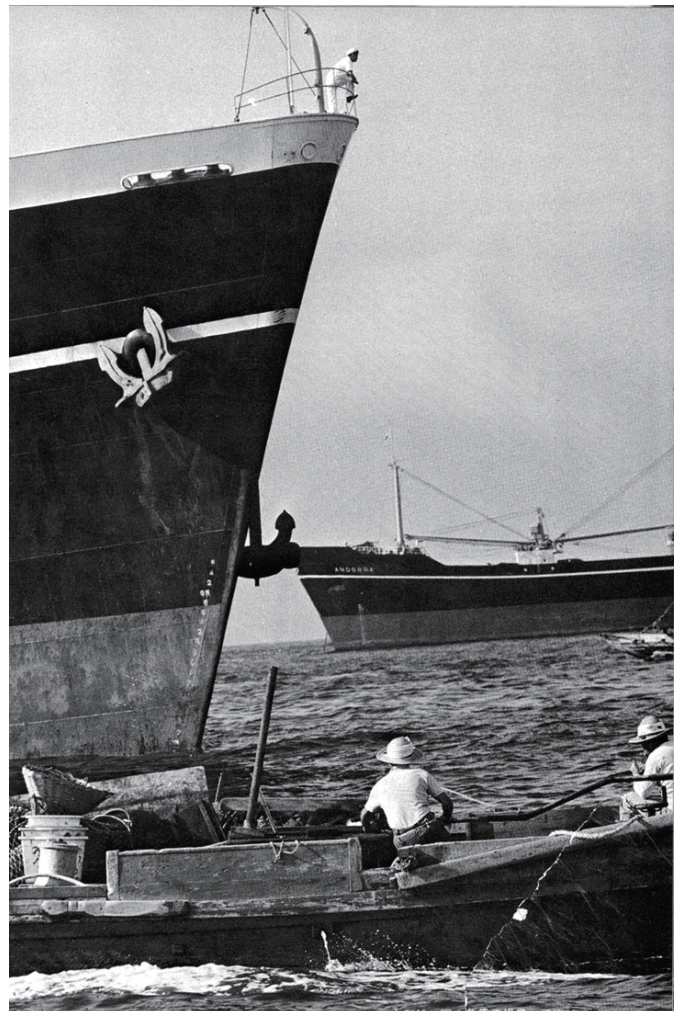
北原龍三さんは1970年ころ、この地を再三訪れ、死に瀕する海を撮っていた。(15 ページ)



舟屋そばにプラスチック製の廃船が腐食しないうまま残る



子安浜風景 1969年8月



大型船に囲まれてた漁場 子安沖 1969年7月



漁業権を放棄が決まった日 1971年9月子安浜

北原龍三 写真集『海よ、黙っているな—東京湾からの（1976・現代史出版会）より

北原龍三 JRP 会員・2002年逝去 他に『アイヌ昨日今日明日』など



現研ギャラリー写真展 12/9~12/26
山口保 「変奏の大地」



「岩にまなざしを向け見ることのできる者」は、岩石の「ほとんど知覚できるくらい」の変化を知る。それは岩石に宿る生命の時間を感知することであろう。岩の凝視・記述とは、太古の地殻変動にさかのぼる岩の生涯を読みとり、それを眼に見えるように記録することと言えるかもしれない。「時軸」の写真が教えるのは、この岩石と大地の生の時間ではないだろうか。

田中純（思想史・東京大学教授） 山口保写真集『時軸』への文

山口保：1948年千葉県生まれ。1985年油彩やオブジェなどの制作をへて、写真による制作に入る。1998年千葉県を中心にした海浜の撮影に取りかかる。2011年写真集『海片』出版（発行＝PLACE M、発売＝新宿書房）。2011年全国の岩盤の撮影に取りかかる。